

古生物学的進化論の確立のために

井 尻 正 二

本誌の前号の巻頭言で、私は古生物学的進化論の確立の必要性についてふれた。今回は、ではなぜ古生物学的という形容詞がついた進化論が必要か、という点について一言しておきたい、と思う。

生物の進化については、これまで大進化と小進化が区別され、前者は古生物学上の進化現象であり、後者は生物学上の進化現象である、とされてきた。しかし、生物の進化とは、生物の歴史そのものであり、生物の系統発生の軌跡以外の何物でもない。したがって、大進化と小進化は次元を異にする現象であって、後者は前者（類）の一構成部分（種）として、前者（大進化）に包含されるべき存在である。

じじつ、Petronievicsによって総括された「生物進化の24法則」などは、そのおおくが古生物学によってみちびきだされた進化の法則であった。しかも、これらの諸法則は、おもに前世紀後半から今世紀初頭の成果であった。

その後、Osborn, Abelのような傑出した古生物学者の進化論もあらわれたが、戦後、Schindewolf, Simpsonといった古生物学者の進化論が台頭するころから、古生物学的進化論は、いささか趣を異にしたかのように感じられる。

というのは、前世紀末を中心にして展開された古生物学的進化論は、あくまで古生物からじかに抽出された進化の諸法則に関するものであった。ところが、戦後のそれは、生物学、とりわけ急激に進歩した遺伝学のおおりのうけ、化石のデータを近代的な生物学の成果にあわせて解釈する、という傾向をもつようになった、と感じられるからである。極端に言えば、古生物学が生物学に左衽した産物とみられるのである。（なお、前世紀末から戦後までの古生物学的進化論の変遷を、当時の世界情勢と社会状況に照合して分析することは、科学的に興味あるテーマとなるであろう。）

ところが、近年、Gould, Stanleyなどといった古生物学者によって、化石のデータにもとづく進化論（たとえば断続平衡説）がにわかに脚光をあびてきて、こんどは逆に、遺伝学者がこれらの進化学説に流し目をする、という面白い状況もうまれてきている。

この現象は古生物学者にとっては、まことにうれしいことであり、古生物学的進化論の確立に、はすみをつけることになるであろう。しかし、私には、この状況を手ばなしでは喜んではいられないように思われる。

というのは、断続平衡説とよばれる古生物学的進化論には、ネオテニー（広義）とよばれる機械的な発生学説が組みこまれていること；化石の成因論（堆積学）がほとんど欠けていること；古生物学者には周知の、種の急激な分岐を、あたかも新発見のように発表していること；ひとたび分岐した種はほとんど進化しない、という驚異的な結論をだしていることなどで、そのままではいただけないからである。すなわち、これらの新興の古生物学的進化論は、まだ悪しき生物学の殻をぬぎきれず、生物の歴史的発展観に弱点をもっているからである。（なお、最近になって、この種の進化論が学界とマスコミに、急にもはやされてきたことの理由の分析も、科学史研究の生きたテーマになるであろう。）

私たちににとっては、生物学、とりわけ近代的生物学の成果を消化吸収し、古生物学的進化論を確立するためのエネルギーにすることは、絶対的な必要条件である。だからといって、このことは古生物現象をもっぱら近代生物学の成果にあてはめたり、それによって解釈することとは、まったくの別問題である。この立場は、古生物学が生物学に左衽することであり、古生物学が生物学のドレイになることにほかならない。

私たちは、前世紀末-今世紀初頭の古生物学者の精神、いやその心意気にたちかえり、古生物の世界からじかに、現代的な古生物学的進化論を確立していく必要があるものと信じられる。